

自然再生をめざして

自然農を実践しながら地域で啓発活動

→ 有機農業の
指導をしている
三瀬村体験農園



田中欽二 たなかきんじ
プロフィール

1939年、満州生まれ。
耕作再生地管理人、さが
有機農業推進協議会理
事長、小農学会世話人
自給自足畑 30 a
タケノコ山 20 a
TEL & FAX
0952-56-2927

← 22年ぶりに有明海特産の二枚貝アゲマキが販売されるとあって朝から長蛇の列ができた直売所。開店早々、売り切れました

22年ぶりに有明海に戻ってきた「アゲマキ」

病害虫防除所の職員から病害虫の被害を抑えれば収量は上がると教えられ、1962年に植物病理学を専攻し、病害の診断と生物的防除（湛水処理等）に努めてきた。化学肥料と農薬の過剰な使用に疑問を感じ、1982年に有機農業に転向した折には、「きれいごとを言うな」と白い目で見られてきたが、作物の生命力や大地の暖かさや生き物の共生などを垣間見ることができた。

福岡正信氏を始め、1962年にレイチェル・カーソン女士の『沈黙の春』と、近代農業への真摯な反省から、1971年に日本有機農業研究会が結成され、化学肥料や農薬に依存しない農業の試みがなされてきた。肥沃な佐賀平野の農地も疲弊し、宝の海であった有明海も死の海と化している。

2018年6月9日に、有明海特産の二枚貝アゲマキが22年ぶりに、60kg出荷され、直売所「まえうみ」には、朝から長蛇の列ができ、開店30分前には整理券がなくなる反響ぶりであった。水産試験場と漁民との共同で、絶滅した生物の復活に多くの市民の願いが伝わったことを実感した。

講演会、圃場見学会、農業指導などを実践

現在は、川口由一氏が提唱する「自然農」に精を出し、生命力のある野菜（菊芋・ギボウシ・長芋など）と野草（セリ・ワラビ・ウドなど）をスーパーやこだわりの店に出荷し、食の大切さを講演会などで啓発している。

現在の活動状況

一、小学1年生（三瀬小学校）に落花生と枝豆を播種から収穫ま



三瀬小学校の1年生もたち
もた枝豆の収穫体験をした
子どもたちも、自分たちで収穫した豆を湯がいて食べました。

(注) 参考 河野武平著『野菜が糖尿病をひきおこす!? 硝酸塩を含む野菜が危ない—野菜を食べて死なないために—』宝島社、2000年

で管理し、収穫直後に圃場内で羽釜で湯がき、おいしさを感じ取ってもらっています。

二、三瀬村体験農園での有機農業の指導をしています。

三、自然農の圃場見学会を5月、8月、11月に開催しています。

11月は、見学会と菊芋の収穫体験を行っています。

四、佐賀県は、肝癌の発病率は全国でナンバーワンであることから、癌患者の知人・友人に硝酸態窒素を多く含むハウス栽培の野菜よりは野草(セリ等)を食べるように勧めています。

五、花クラブでの取り組み

アバンセ(佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター)の玄関の花壇に花を植えて管理していますが、会員の減少により維持管理がむずかしくなってきました。そこで、水管理等をしなくても生育できる生命力のある野の花(ギボウシやクレオメ等)に変える試みを行っています。